
ライクナイフ

まち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライクナイフ

【Zコード】

Z5520A

【作者名】

まち
り

【あらすじ】

あたしはナイフが好き。キスよりセックスよりナイフが大好き。
あんたに似てるから。

プロローグ

銀のきらめきは好き。

鈍い色もまあまあ。

柄がどんな形だろうが刃渡りがどれだけの長さだろうが、あたしはコレがあれば別にそれで良い。

「ねえ」

背中しか向けないから仕方なく、背中に。好き、って言つたら、急にキモいって言われた。

別にそれで構わない。冷たくて鋭いあんたに、あたしはぞくぞくしてゐる。

プロローグ（後書き）

そういうば好きなんて言葉あたしは言わない。

一話 ヒナゲシ

「コレ可愛い」

アキがそう言つたから、その先を見つめた。

それはそれはあたしより全然高いビルの一階の、通りに面したウインドウ。そこに真っ白なマネキンがいて、誇らしげに服を着ていた。黒いシャツに白いパンツに、その店では置いてないはずのなんか良くな分からぬ犬の置物。

足が極端に短いし、目がでかすぎて気持ち悪い。

「服」の前買つたじやん

「でも可愛いー いくらかな? 一万までなら出す」

「持つてんの?」

「いや、賢ちゃんが出す

「うわ。ひで」

別に酷くないしー。

間延びしたあぐびみたいな声で、アキはショッピングに入つてくる。

「いらっしゃいませえ」

やたらと高い店員の声にイラッときたけビシカトして。

あたしは小物を見に、アキは店員とティスプレイのところに向かう。

「コレ可愛いんですけど」

「でしょー? それ今売りますよ、色違いで」「かうにあるんですね
けどお」

きやあきやあ言つて店の中を横切る。
ありや後で店員がうざかつたつてあたしに言つんだらうつなアキ
わ。

「何かお探しですか？」

隣りがむわつと臭くなつた。

ここまで酷い香水の匂いは久しぶりに嗅いだ。
ブルガリの匂い。

ブルガリがこんなに嫌な匂いつて思うなんて。

「いや別に。付き添いです」

「そうですか」

あたしが軽く追い払つたみたいになつた。

でも今日はあんまり人に話しかけられたくない。

「ねえハルカあ、賢治呼んだら怒る？」

いや店の端から端で話したら周りうつさいから。
あたしは別に良いよってひらひら手を振つてやる。
伝わつたかな。

「賢治ねえ、ハルカいないと来んて言つたからハルカ構つてやって
え」

服を買つたらしくて、そのままレジに向かうアキがあたしの横を
通り過ぎる。

「あんたの彼氏なのに」

「ハルカは賢治取らんでしょ！ 前コレ浮氣？ つて賢治からまじ顔で聞かれた」

「……そう」

「浮氣じやないよねえ、ハルカ美人だから許す。男が放つておかんわけよ」

意味分からん。

でも、その賢治君を待たずしに服買つたの。
アキが彼氏を大事にしてるかしてないかはあたしには計り知れない。

高一で付き合い始めた二人は一年くらい続いている。

一年で、あたしにはどうしたら一年も付き合えるか想像もつかない。
賢治君は専門学生。アキはあたしと同じ大学生。
合コンで出会つたにしては一年で……。

「□□名前なんていう？ あ、電話かかつてきた」「何が？」

「あ、賢ちゃん？ うん、今ハルカと買い物してた。えと……H-I
N-A-G-E-S-H-I……ヒナゲシ？ にいるよ」

あたしが店の名前を確かめるより先に、アキは賢治君に居場所を教える。

「え、飯？ 行く、行く！」

「飯？ さつきスタバでベーグル食べてたのに！」

あたしは内心突っ込んでから、ふと店の名前を見た。
ヒナゲシ、つて変な名前。

ローマ字？

店内は白を基調にしたコンクリ造りの、美容室みたいになつてゐる。

アルミで包んだ柱が何本か突き出てるけど、それが味があつてオシ
ヤレ。

ヒナゲシ。

……ヒナゲシ。

そういえば、ヒナゲシってどんな花だつたっけ？

一話 ヒナゲシ（後書き）

何色の花だったか知らない。
見た事はきっとあると思ひなが。

一話 ピアス

「ハルカちゃん久」

「いや昨日会つたじやん、バス一緒だつたよ」

「あ、そだつけ？」

賢治君がしばらくして念流した時は、店を出て、なんとかつとうパスタの店にいた。

賢治君はとにかく背が高くて、理屈抜きでかつこいい。バスケしたら伸びたつて聞いたけど、バスケ部に入つてたわけじゃないらしい。

部活はやめて、絶対似合わないつて笑つたら、賢治君も笑つた。今日は黒っぽい服着てる。新しい靴だつて言つて紹介した靴は、田が飛び出るかと思うくらい高い靴だった。

「いらっしゃいませえ」

「いらっしゃいましたあ」

愛想悪い店員に、愛想悪く絡んだ賢治君を、アキが慌てて止める。なんかかなり二人は仲が良い。あたし一人見てるの好き。

ところで店内はがらり。

こりゃ近々潰れるんじゃない？

適当に座つたら水が運ばれてくる。まだ五月なのにこんなに氷入れられたら下すわ、つてくらいコップには半分以上氷。

「何食べる？ 今日は買い物付き合つてくれたからあたし奢るよ

「うそ、アキ優しいねえ」

賢治君が奢られる立場に早変わり。

あたしはひとりで辞退する。奢り物のあまり好きじゃないから、今日は親から金もひつてたし。

「そ？ ジャあアザートあげるよ」

「マジでえ？ やつたね」

「賢ちゃんにはさつきから言つてないべ？」

アキが笑つた。

あたしもつられて笑う。

あたしはシーザーサラダを頼んだ。野菜が食べたくて頼んだのに、アキがダイエット中つて聞いてきた。

いや、してないから。

アキはカルボナーラ頼んで、賢治君がボロネーゼを頼む。夜はここで済ませるみたい。

「アキもダイエットしないの～？」

氣怠い口調で賢治君が聞くと、しないしないってアキは笑つた。だつてしなくて良いよ、それ以上肉取つたらアキ骨と皮だけになっちゃうから。

あたしは身長が一六三ある。

アキは一五七。

この差はでかくてアキがスカートはくと可愛いんだコレが。

あたしはいつもパンツしかはかない。だつて似合わないんだよなあ、なんか。

ぐるぐるロールはアキに似合つてて、あたしは良くアキの髪触る。そういえば小さい頃は美容師になりたかったけど、今はそんなに思わない。だから時々アキの髪触るだけで良い。

「あ、ピアスの穴増えた？」

「え？ ああ、昨日病院行つたんだ」

賢治君がふと声をかける。

あたしのピアスホールがいくつあるか知つてたの？

「右に二個、左に三個じゃね」

「うううう。……でもなんか昨日開けた後になつてそろそろ飽きたかもつて思った」

かなり金に近いあたしの髪が耳を邪魔してたから、右を紹介するようになに髪を上げる。

「穴開けるの前は好きだつたんだけど今そうでもない」

「うわマゾか

「マゾで」

賢治君は柔らかく笑つて、携帯に目を向けた。
今時の曲じやない珍しい着信音が鳴つたから。
なんだろ、コレ。
そんなに激しい曲じやなくて……。

「ハルカあ、ちょっと化粧室つて来る~」

「ん、行ってら」

アキはアキでトイレに行つたから、あたしは一人になつた感じでした。

着信音が何の曲だつたか考へてる。

ちょっと暗い、多分歌じやない。歌詞がない……クラシック？

「ねえハルカちゃん耳貸して」

いきなり賢治君が顔を上げた。

「貸したくない」

「良いから、良い事教えたげるから」

着信音にも、メールか電話が着た事にも気付いたのに、賢治君は携帯を放つて、席を立ち上がる。

貸す気なかつたのに、もうあたしの耳元にいる。

「何よ、良い事?」

「俺には」

イイコト。

窓側の席で、ちょっと出っ張りから影になつてた場所。その影をもつ一つ覆いつぶして、賢治君の腕が、あたしのイスに落ちる。

ちょっとした密室空間? ?

ナニ?

って言おうとした時には遅かった。

くちや、って音を、耳がひろつた。

震えるような甘美な感覚に目を見開く。

「ちょ」

「ファースト取れたらまた舐めてイ?」

まだちょつとここにこらなし痛む耳の、ピアスの針を入れ込んだ穴辺りを舐められたのだ。「何がイイコトよ？」

あたしは呆然となってしまった。
友達の彼氏に耳を舐められるなんて。

一話 ピタス（後書き）

傷つけられるのは構わないけど、優しい愛撫は勘弁して。

三話 ブラック

浅はかにも感じた。

あの陶酔は、なかなか得られない。

「何一人仲良じじゃんー 賢治席まで立つたの?..」

トイレから帰ってきたアキが、立ち上がりであたしと話してゐ（よう）に見えた）賢治君にちらりとヤキモチ。

「ハルカちゃんと俺普通に仲良いよ」

「そあ? 変な事しないでよねー」

「したくなつたらするから妬かないでな

もー!

つてアキが笑つたけど、「ごめん。笑い事じゃないから。

あたしは浮気の範囲がかなり広い。今を、あたしの彼氏がヤッてたらあたし絶対に別れた。

浮氣するのは良いんだ。浮氣は美德だあとが馬鹿なおっさんが前ほざいてたけど、うん。それならそれで良い。でもあたしがされたら正直譲つけやつ。要らないよ、あげるよつて。

今のは完璧賢治君が悪い。しばらく冷たくしてやる。

あたし達はその後料理をたいらげた。チーフだし、潰れそなくらしい人いなかつたからてつきり不味いかと思つたけど、かなり美味しかつた。

じちそつせま。

あたしは一人と分かれた後、家にまつしぐらした。
今日は生理二日目でかなり下腹部が痛かったから。

歩く。

止まる。

歩く。

なんかあたしが歩いてんじゃなくて、回りが歩いてるみたいな感じ。

人が背景になつて流れる。流される。
嫌い。

これは好きじゃない。

家に帰る。

ドアを開ける。

だだつ広い家に、生活臭が全く感じられなくて、また田まいがした。

ここはつい最近引っ越したマンションで、かなり新しい。綺麗だけど梱包したままの段ボールがそこかしこにちらばつてる。
朝読んだ母親の置き手紙がそのままになつてた。

コレでご飯を食べなさい、つて五千円。

どんだけ食べばそんなかかるんだよ、つて思つたけど、あたしは
今日それ半分以上使つた。

スタバとパスタで。

リビングのソファに腰を下ろす。

静かだなあ。

「あれ何の曲だっけ」

この空間に、音楽が流れるってのはどうだろ。

あたしはふとかなり良い事を思い付いたように田線を上げた。

豪奢なシャンデリアと、真っ白な天井を眺めてから、溜め息をつ

く。

要らない。

この場所にあんな音楽が似合つわけない。

テレビをつけた。

クイズ番組もバラエティも見たくない。ドラマは飽きた。
結局ニュースをつけっぱなしにしどいた。社会勉強。

ピンポーン。

「ん？」

その時チャイムが鳴った。
お母さん鍵忘れたんかな。

ピンポーン。

つてまた鳴つた。マジで誰。

あたしは不機嫌になつたから居留守使つてやるひつと思つた。
でもそのチャイム、壊れるぞつてくらい鳴り始めた。ピンポー
ンピンポーンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポーン—

「タコがつ！ んな連打しまくんな」

あたしはもう完璧に切れ、ソファから立ち上るとチューインも
かけずにドアを開けた。
これはちょっと失敗したと思つた。

「何すか」

ガチャって乾いた音を立てて、鍵が開いた瞬間、ノブを握つてたあたし」と、ぐいと引かれた。
扉が開く。

「聞こえてるならさつと開けろ」

「な

誰？ つて顔を上げた瞬間、あたしの目は眩になつた。

か、っこいい。

けど、知らない人。

で、服が変。割とかちつとしたタイプのスーツを着てるんだけど、それがかなりぼろぼろになつてて。

ついでつから雨降つてたから濡れてるのは分かるけど。

「あの……」

「客か？」

「客？」

「……カイは来てるのか」

「誰それ」

あたしはもう完全にきよどつた。

「……おやさん誰？」

あんたこそ誰？

あたしはただただ立ち去くした。

三話 フラック（後書き）

夜で、雨で。アンタのスースイの色は黒だったよね。

四話 キス

「岩下だけど。岩下ハルカ」

「…………」

驚いたあたしの後に、今度はそいつが驚いたのを見て、あたしは
ちょつとおかしくなった。

間違えたんだ、コイツ。ベタな話で、あたしらが最近越してきた
から、前に住んでた奴と勘違いしてんだ。

「悪い、人違い」

「でしょーこの家まだ三か月も住んでないもん」

一瞬男は途方もない顔になつた。

あたしは、チャイム連打するような相手じゃないから憤りも吐け
ないだろうし。

「お兄さんホスト？」

「まさか。何で」

「や、スース珍しいし。頬良いし」

ホストみたっていうか、とにかく今時のかっこいいって顔。
照れたり、嫌がつたり何もしないで、男はドアから手を離そうと
した。

もう帰っちゃうのか。

「ね、今まだ雨だからウチ入つてなよ」

うわ。

やばい、あたし軽い？

なんかね、その時はちょっとおかしかったんだ。
だってソイツ変なんだもん。めちゃくちゃ田付き悪いし態度悪い
し、顔かっこいいし。なのに何か雰囲気に飲まれた。
何されても良いよって思った。

「じゃあお皿葉に甘えて」

嘲笑、に近い笑みを向けられる。

それは快感にも似てあたしに降りかかった。
やばいよ。

落ちるかもしない。

あたしは背伸びして、男の唇を奪つてた。
キスしたかったから。

恥ずかしい。

抗いたい。

抗えない。

初対面の人にはこんな。

「舌は？」

「……ん」

陶酔に酔つてたあたしは、いつひいてあげる。

「舌は入れないのか、お嬢様」

「……っん……」「

あたしはその後めちゃくちゃ「ティープ」にキスをねてた。

舌が絡み付いて、口の中ヤラれてた。

やばい、やばい、やばい。絶対やばい。

『一皿ぼれ』

なんてキモくて言えない。

あたしの長い髪、は。そいつの手で触れられた。
暗めの茶色にして、言つたってどうしても赤くなっちゃう困つ
た髪。

しゅくもーかけまくって色ぬきまくってあんまり綺麗じゃない髪。

「ガキだな、ママはまだ帰つてないのか

ふと皿をあげる。

男と皿が合ひつい。

お言葉に甘えるなんて言つたのに、男は笑つて出でていった。

笑い方、好き。

可愛いって言つたら変だけど。

部屋に一人。

家に一人。

母はどうぶん。

帰つてこない。

四話 キス（後書き）

キスはレモン味、なんて言った変態に会ってみたい。

五話 アカマル

どうかしてる。

さつきからずっと、あたしはあるの名前も知らない男の顔や仕草を思い出していた。

恥ずかしい。

頬が額が全身がほてる。熱くて熱くて、でもそれが全然不快じゃない。

また会えたら良いなあ。

名前だけでも聞いてたら良かつた。

あたしはソファに沈んで、ぼんやり天井を見上げる。

雨はとにかく本降りで、雨音が煩わしい。

普段はあんまり見ない携帯の画面に十七件もお知らせが入つててびびった。

寂しくて見た携帯のせいで、ウザくなつた。

× × ×

雨降つてゐるから嫌だつたけど、あたしは煙草買いに行こうつて傘をして、また外に出た。

煙草は実は全然吸わない。賢治君がへビーうしいけど、それもどうでも良くて。

煙草が欲しかつたのは……。

自販機は嫌。

コンビニも嫌。

スーパーは死んでも嫌。

……もう選択肢なくなつた?

あたしは暗いのに黒の傘で、今日のトートバッグも黒で、気分はちつとも明るくない。

「ねえねえ、何してんの一ー?」

「ん?」

「うひうひうひ田的もなく彷徨うあたしに声をかける奴がいた。
え。雨なのにナンパ?
まあ夜だし小雨だし。

「あ、賢治君」

振り返つたら賢治君がいた。ナンパかと思つてから一氣急くて軽い
口調だからてつきり。

「めひやくひや濡れてるじやん!」

「やーあれからアキと一緒にラーラブしてたら今田アレの田だつて
逃げられたー!」

「生々しいからせめてよ」

アキも生理だった。

あたしは生々しいカップルの小ネタを聞いても、だから何で賢治
君がずぶ濡れでうろついてるのかは分からなかつた。

「ハルカちゃんは何してんのさ」

「んー……」

正直に煙草買いに来たつて言いたかったけど、何か言いたくない。
言葉をにじます。

沈黙が降る。

「煙草、何吸つてんの？」

「んー？ 煙草？」

あたしは本当煙草は吸わないから、賢治君がちよつと驚いた。

「え、田覚めちやつたの？」

「何に」

「煙草の世界」

「どこよ、それ。

あたしは肩をすくめる。結局何であたしが煙草買いに来たとか言
いたくなかったのが分からないまま答えてします。

「女の子だからねー、しかもハルカちゃんだからねー」

近くにあつた煙草の自販機の前で止まつて、賢治君は自販機の左
隅を指した。

つこちよつと前に出た紫色のパッケージの煙草。

「コレはあ？」

「んー……」

決め手にかけた。

女の子、男の子に分けたらダメなの。

「じゃあ、ひがみ？」

今度はピンクを指したけど、あたしは両方却下した。

「賢治君は何吸つてんの？」

「俺え？ 俺あんまりコレつていつた銘柄は吸わんけど、今日はアカマル持つてる」

マルボロかあ。

中途半端な赤と、中途半端に親切な注意書き。

氣急くて無気力な手から差し出された煙草は、鋭かつた。鋭利で、ギラギラしてた。

あたしひじやあそれ買つて。言つてた。

五話 アカマル（後書き）

煙草の味がしたから。吸つてみたかったの。

六話 カレシ

「アカマルつて結構すごいけど大丈夫?」「すごいって何が?」

もうチャラチャラつて小銭突っ込んであたしは煙草を手にした後
だけど、賢治君が言う。

「タールの量とか」
「良いよ、何でも」
「吸つてみたいだけなら俺のやるのに」
「箱が欲しかったの」

これ実は嘘じやない。煙草つてちょっとだけ大人な気分になれる
氣がする。

あたしはまだ十九で、煙草は吸えない年だけど、十九で吸いたい
けど吸つてませーんて人はいないよね。

あたしは吸わなくて良いから今まで吸わなかつたから、やつぱり
煙草がちょっと背伸びしたように思えるのはそのせい。

「箱可愛いのならやつぱりローズとかが良かつたんじゃねー?」

まあ良いけどーつて、賢治君は笑つた。

傘を彼が持つて、あたしと肩を並べて帰る。

175センチあるらしい。175が男の中でどれくらいの背なの
かは知らないけど、あたしは高いと思う。

の人つて175以上あつたかな。

あたしはちょっと考えて、賢治君の頭らへんをガン見。

「なあに?」

「つづん」

賢治君は笑つたけど、あたしは別に笑わずに考えてた。
もう一つ考へてたのは、マンションまで賢治君が送つてくれてる
事。

「送らなくて良かつたのに……」

「いや実は傘に入りたかった」

嘘つや。

賢治君の家は全然逆方向だから、今は確かに傘入つて濡れてない
けど帰りがけ濡れるじゃん。

あたしのウチ傘あつたかなあ。ちょっと可愛いけどこの傘貸せば
いいかなあ。

あたしは傘の中の密室で傘の事を考へてた。

ドキドキはしなかつたけど、ちよつと照れる。

浮気性の元カレをフツてから、三か月たつてた。あたしはからか
らに干からびたみたいに思つたけど、体は賢治君を男の一人として
数えてないみたい。

キスしたり、抱き合つたりちつともしたいと思わないから。

まあ友達の彼氏とだけは絶対に良い雰囲気になりたくないんだけ
ど。

雨は小雨。

じとじと気持ち悪い。

「ねえねえハルカちゃん、茶あ飲みたい」

「玄関先なら良いよ」

あたしは一ヶ「コ。

賢治君に下心があつたかないかは分からぬけど、お母さんが帰つてくるかもつて不安はなかつた。

そうじやない。

「家には彼氏しかいれないの」

あたしは笑う。

玄関なら良いや、でもそれならやつぱり帰つた方が良いんじやない?

あたしは賢治君がどんな反応するか見てたけど、だから送つてもらうの悪こつて思つたんだけど、賢治君は全然予想外の言葉を話した。

「じゃあ良いや、玄関先までいれられたら俺オケだと思つてゐるから」「何それ、狼さん?」

実際そんな可愛いもんじやないだらうなあ、彼は。

「浮氣もほゞほゞにしてよー? アキ知つてんだから」

アキから聞くには賢治君は浮氣してゐて疑惑。知らないけどね。

そしたら賢治君はあよとさ。

「浮氣とかしてないよーなんで浮氣になんのせ」

またコイツは。

「だつて……」

「なんで」

「なんでって……」

「賢治って呼んでよ」

「は？」

「俺の事賢治君って呼ぶじゃんね。呼び捨てで呼んでよ
一瞬何を言われたのか分からなくなつた。

名前、の呼び方なんて。

「……呼び捨てなんて出来ないよ」

慌てる。

否定する。

「彼氏しか……呼び捨て出来ないから」

「また彼氏限定？」

賢治君は今までの真剣な顔じゃなくなつていつもの氣怠い笑みじ
やくなつた。
けど、ふと考えるようにして、いざすように言った。

「じゃあ彼氏にしちゃって」

「ちょ、アキはつ」

ああね。

つて賢治君が言った。

「アキとはもう別れたんだけど」

聞かされてなかつたの、つても言つた。

六話 カレシ（後書き）

うん。

そんな事、知らなかつたよ。

七話 テンランカイノエ

あまりにあっけに取られいで、その話を聞きたくなくて、あたしは違う事を聞いていた。

「ねえ賢治君の着信って何の曲?」

「は? え、もしかしてスルーなの?」

いや、気になつて、って言葉を濁したけど、あたしはてんで上の空だった。

それより気になつたのは違う事だつたくせに。

「アキはなんて……」

俯いて、雨に濡れた袖をつまむ。

それに気付いて、賢治君は傘の場所をずらす。

「良いよって言った

「……いつから……」

「もう別れてから一か月くらいなるよ」

「そう……」

あたしは飽きるのがすぐ早い。

別れるのも早いし、実は良く相手に浮氣される。

それでもアキと賢治君の関係はやつぱり懐れてて、好きで、だから自分の恋愛なんかよりずっとショックをつけてた。そんなの。

「じゃあねえ、おやすみ」

こいつの間にかあたし達はマンションにつられて、あたしは結構長

い事ぼんやりしてた事が分かつた。

「ハルカちゃん」めんねえ

「何が……？」

「いや、ぼんやりだから」

「謝らなくて良いじゃん」

「？」

「あのね。

賢治君が言った。

「展覧会の絵つて曲だよ、すげえ好きな曲なんだ」

そう言つて、ちょっとだけ彼は笑つた。

× × ×

「あら、早かつたのね」
帰つたら母親がいた。

あたしは家には誰もいないと思つていたから物凄く驚いた。

「お母さん、帰つてたの」
「ええ。……『』飯は？ もう食べたの？」
「外で食べた。……あ、そだお金返すね」

あたしは鞄から財布を取り出しました。
お母さんは慌てて首を振つた。

「良このよ、もうひてなさい」

「ありがと」

「それよつねぬをもひ田ぬから、口縛まつちやんとしてなれこむ」

また、どいかに行くのか。

あたしなれつ」だったたし、一人の空間も好きだったから良かつたんだナビ。

今日だけは。

ベタベタした優しさは要らない。ナビ。

「おやすみ」

「あい、もう寝るのね。おやすみ」

明日は良この田になるとい。

良この田になれば。

今日はこころありすぎた。

展覧会の絵つて歌が頭の中に流れ、それからあの名前も知らない男の事を考えてる。

ベッドに座つて、一回田か三回田の、慣れてない煙草を吸つた。

七話 テンランカイノエ（後書き）

まるで自慰するくらいこの虚しさと、やられてるくらいこの快感が、同時にかけめぐつた。

八話 サイカイ？

学校サボつた。

大学の講義はなかなか適当。あたしはノートは友達に取つてもらつて、良くサボつたりしてる。

あんまり確定した未来があつて、そのために頑張つてるわけじゃない。

今日は、アキの顔見れないし、あたしの顔を見せたくない。

だから、サボつた。

携帯の電源は切つてる。昨日は心細かつたのに、今日は一人が楽しい。

どこ行こう、何しよう。

あたしには時間がたくさんあつて、あたしは自由だ。

ヒナゲシって店にもう一回行きたくて、いつもはあんまり出歩かない町をぶらぶらする。

良い天気。

昨日は雨降つてたから。

「おねえさん、一人？」

しばらく歩くと声をかけられた。だつぼだぼのズボン履いたピアスだらけの男。

身長が、ヒール履いたあたしと変わらない。

「一人になりたいから一人なの」

あたしは気分が良くて、声をかけた男を通り過ぎる。

一瞬きょとんつとした顔が少しかわいかつたかな？ でも年下は

「めん。

ケーキが、食べたい。

ワンホール全部自分で食べたい。
一人で、たつた一人で。

あたしは歩く。

歩いて歩いて、しばらくして。

ヒナゲシについた。

相変わらず、可愛い店なのに奥まつて、回りにあんまり店がないせいか、ローカルな雰囲気しかない。

人はそんなにいない。

時間帯を考えるとそろかも。

「いらっしゃいませ」

店に入つて、あたしを迎えた声は、男の人の声だった。

ウザイ店員より全然マシ。

あたしは右側から順に店内を回る。

パンツは持つてゐから要らない。ジーンズはロールアップが欲しかつたけど、ジーンズと靴だけは良い物を買いたいから、ブランドが良い。

上着は要らなくなる時期になつたし、ていーしゃつはいっぱい持つてる。

あら？ あたし何でここへ来たんだろ。

ヒナゲシって変わった名前の店だけど、とにかく店の雰囲気は好

きだつた。

店員総入れ替えすりや 良いの!。

「何かお探しですか」

昨日が特殊だったのか、落ち着いた男の声が隣りから聞こえる。
別に何も……
言いかけたあたしは田を見開いた。

「……！」

昨日の…

昨日の男が田の前にいた。昨日のとは違うみたいだけど、黒のス
ーツ着て接客しててる。

「入ってきた時から気付いてたのにそっけないな」

とろけるような甘い微笑じゅない。どっちかついづと常に嘲笑
に近い人を見下した笑い方をしてるんだけど、とにかくあたしはそ
の笑い方が好き。

あんなに嵐のように去つていった男なのに、あたしは全部覚えて
る。

今日は髪がぬれてない。昨日はひょっと濡れてたからか今日の固
めた髪がめちゃH口いつて思った。

あたしより一、二歳上かな？一十歳ちよこすきで髪が黒い。

髪が黒くて、ピアスが多い。

耳にじゅりじゅり舌にも窓にしてる。

マッシュだけでもくない。やまこへりこかつじこ。

「店員?」

「いや、上で医者やつてる

「医者?」

「穴開ける医者」

穴つて……。

「耳とかへそとか」

「ああ、なんだ」

「なんだって、何だと思った?」

あたしはひょっと考えて、確実に適格な言葉を吐いた。

「アンタが言いつとサドっぽい」「サディストだからね」

あ、暴露しやがった。

八話 サイカイ？（後書き）

ちなみにあたしはびうじょうもなこマゾ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520a/>

ライクナイフ

2010年12月14日20時43分発行